

その後、ヴァルターはマードックから四百ページに渡る採鉱システムの資料を手渡された。ローレシア沖の海底地形、鉱物資源の分布図、採鉱スケジュール、その他諸々の情報が掲載された分厚いマニュアルの他に、接続ミッシヨンのシミュレーション映像、各機の設計図、ミッシオン当日の役割分担と時刻みのスケジュールが記された行程表などだ。「二週間でマスターするように」とマードックは言った。

それだけでも大きなプレッシャーだが、何より許し難いのは、大水深での接続作業についてひと言も口にもせず、「死亡時意思確認書」など書かせてここまで連れてきたアル・マクダエルだ。(あのタヌキは腹に何か隠し持っている)と薄々感じてはいたが、この事だったのか。

彼にとって水深三〇〇〇メートルに潜航するぐらい訳ないことだ。水深六〇〇〇メートルの海淵でも、溶岩が流れる海底火山の火口でも、摂氏数百度の熱水噴出孔でも、「行け」と言われたら何処へでも行く。そし

て今も、アステリアの大深度を調査しろと言われたら、躊躇いなく潜るだろう。

だが、水深三〇〇〇メートル下で揚鉱管を繋ぐとなれば話は別だ。時間をかけて演習するならともかく、六週間ちよつとで採鉱システムの構造や手順を習得し、テスト潜航も無しに大水深で揚鉱管や高電圧リアクターを接続するなど、無茶もいいところではないか。

しかもパートナーは二十二歳の大学生だ。

一つ間違えば命を落としかねないミッシオンに素人のアシスタントを付けるのも腹立たしいが、自分が十数年の歳月をかけて、やっと体得したプロテウスの操縦を、生ちよろい大学生に易々と真似されるのはもつと癪に障る。

(この俺を何だと思つてやがる)

彼は犬みたいに室内を歩き回り、なんとか怒りを収めようとしたが、収めようとすればするほど怒りがマダマダのように噴き出し、罵倒が口を突いて出そうになる。

そして、とうとう携帯電話を手にとると、マードックに「妙な気を起こすな」とあれほどきつく言われたにもかかわらず、アル・マクダエルの個人番号にダイ

ヤルした。

三度目の呼び出し音でアルが電話を取り、「今、会議中だ」と不快感を露わにすると、彼は間髪入れずに言った。

「あんた、プロテウスのことを知ってて、俺に隠してたな？」

「何のことかね」

「接続ミッシュョンだよ。大水深で揚鉱管や高電圧リアクターを接続する話だ。あんた、それがどれほど危険なことか分かっているのか？」

「それならマードックが責任もって教えてくれる。彼の言うことをしっかり聞いて、手技を学べばよい」

「おい、聞けよ、俺が言いたいのはな……」

「お前の言いたいことは分かっている。だが、二十二歳の大学生でも出来たことを、なぜキャリアも技術も上のお前が取り組む前から無理だとわめく？ それとも、お前の技能は一年五ヶ月のプランクが空いたぐらいで使い物にならなくなるような代物なのか？ 甘ったれるのいい加減にしろ。二度とこんなくだらんことで電話するな」

一方的に電話が切れた。

彼は茫然と携帯電話を握りしめていたが、あまりの悔しさに床を踏み鳴らすと、勢いよく部屋を飛び出した。

それから建物外の非常階段を駆け上がり、屋上でしばらく頭を冷やしていたが、プラットフォーム後方にある重機の格納庫に目を留めると、手摺りから身を乗り出した。

銀鼠色の格納庫は背の高い蒲鉾形で、横幅三五メートル、奥行き三〇メートル、頑丈な鋼製スチールで構成されている。屋根には太陽光発電パネル、側面上部には大型の採光窓が取り付けられ、プルザネの格納庫に似た作りだ。そこにプロテウスがあるのではないかと目を凝らすと、ここから内部の様子は窺い知れない。

格納庫の後方には作業甲板があり、懐かしい機材が揃っている。二五〇トンまで吊り上げ可能なAフレームクレーンや一本脚のパワークレーン、小型調査機や水中機材を巻き上げる大小の船舶用ウィンチ、ケーブル用ドラム、作業用台車、等々。

誘われるように視線を巡らせた時、Aフレームクレーンの手前にプロテウスの黄色い船体を見つけた。周りに人が無いところを見ると、ちょうど作業が終わっ

たところだろうか。彼は風のように階段を駆け下りると、真っ直ぐプロテウスに向かった。

作業台座に固定された船体は海洋技術センターと全く同じ、全長九メートル、幅二・七メートル、高さ三・五メートル。ツェッペリン飛行船のような形状で、鮮やかなクロムイエローの船体には黒いゴシック文字で『PROTEUS』と刻まれている。外殻も海洋技術センターと同じ、ざら感のある炭素繊維強化プラスチック製だ。手を伸ばすと、懐かしい感触がする。もう二度と目にすることはないと思っていただけに、嬉しいというより不思議な気分だ。

思えば、道を決めたのもプロテウスなら、活路を開いたのもプロテウスだ。あれほど故郷フールグムに帰りたいと願っていたのに、大学卒業後もフランスに留まったのは、故郷と同じくらい深海に魅せられていたからだ。

深海調査も、高度に発達した自律型無人潜水機（AUV）や、光・電力複合ケーブルを介した有索水中無人機に取って代わられ、お金も手間もかかる有人潜水調査の意義について取り沙汰されることが多い。

それでも、実際に人が潜って、深海底を監視する体験は格別だ。

水中カメラや音波探査でも詳細なデータを得ることはできるが、人間のふとした「気付き」が思いがけない発見をもたらすこともある。また、無人機では侵入の難しい複雑な地形も、有人潜水艇なら臨機応変に進路を変更し、深部まで近付くことができる。

無人機がどれほど発達しようとして、有人潜水が完全に無くなることはあり得ず、熟練のパイロットはもちろん、通信ナビゲーター、クレーンのオペレーター、支援船を運航する乗務員の存在も非常に重要だ。惑星探査機みたいに、一度発射すれば目的の地まで計算通りに突き進むのと異なり、船の航行は波や風雨との闘い、技術以上に、船乗りの勘と経験が物を言うからだ。

とはいえ、調査の主役はあくまで研究者であり、彼もいくら海洋学を修めたとはいえ、その分野の権威とされる科学者から見れば、一介のパイロットに過ぎない。危険を呈して海底地形の複雑な所や、溶岩の流れ出す火口に接近し、学術的に非常に貴重なサンプルを持ち帰っても、その手柄は研究者のものであって、彼のものではない。だが、それでもよかった。パイロットにはパイロットの役割があるからだ。

多くはパイロットの働きを心からねぎらい、「次もよ

ろしく」と言ってくれるが、中には「言われた通りに操縦すればいい」という横柄な人もある。「今時、大学生でも自家用潜水艇で海底火山を見に出かけるというじゃないか」などと失礼な事を言う人も。

しかし、大学生が自家用潜水艇で海底火山を見に出かけるからといって、何だというのだろうか？ 見るだけなら誰でもできるが、「観る」となれば次元が違う。覗き窓の向こうをぼんやり眺めて、火口から溶岩が流れ出す様を手を叩いて喜ぶ物見遊山とは根本から異なるからだ。

それに大深度の潜航では何よりも安全性が求められる。物見遊山の深海ツアーと学術調査の違いは、前者は前もって安全が確認されたコースを回るが、後者は未知の深海に赴き、必ずしも安全は保証されていない点だ。いろんな安全対策が施されているとはいえ、電気系統のトラブルに見舞われたり、複雑な地形に阻まれて身動きがとれなくなったりすれば生命の危険に晒され、深度が大きいほど助かる可能性も低くなる。

また超高压の深海では、些細な亀裂でも瞬時に船体を破損する恐れがあり、部品や電気系統のトラブルに對して的確な処置が出来る能力も必要とされる。大学

生が自家用潜水艇で海底火山を見物に行く時代になったからといって、誰もが水深数千メートルに潜航できるわけではない。

彼は非常に高いプロ意識をもって仕事に取り組み、器用にマニピュレーターやサンプラーを使って、学術的に価値のある生物や堆積物のサンプルを数多く持ち帰った。動きが不安定な中、対象にぎりぎりまで近づいて、熱水活動や泥火山のビデオ撮影もやってのけた。心の底から海を愛し、一つ一つの潜航に己の矜持を懸ければこそ、異例の早さで潜航回数一二〇回を達成したのだ。

そして、そのように人生をやり直そうと、ここまで来てみれば、海洋調査ではなく揚鉱管の接続という。何もかも知っていたくせに、タヌキみたいに押し隠し、挙げ句の果てが「大学生にも出来た」。人を馬鹿にするにも程がある。俺はこんな不当な扱いを受ける為に来たんじゃない。

再び怒りが込み上げた時、背後で人の気配がした。「やあ、やっぱりここに居たな」

振り返ると、マードックが立っていた。

「さっき、理事長から電話があった。勤が戻るまで、

君にトレーニングしてやれって。僕も当然そうするつもりだったが、君も頭に血が上ったから言いそびれた。理事長いわく、助け船を出すのは今度が最後だろうだ。『次は知らない、勝手にしろ』って」

「……お節介め」

「君、よほど理事長に気に入られてるんだな」

「俺が？」

「そうさ。本当に気に入らなきゃ、何も言わずに放っておくさ。わざわざ僕に電話までするなんて、ちよっぴり妬けるなあ」

マードックが面白そうに言うのと、彼はぶいと横を向いた。

「人手が足りなくて切羽詰まってるんだ。そうでなきゃ、俺なんか声を掛けるわけがない」

「あの人はそこまで単純じゃないよ」

「だったら、なんで任務もポジションも与えず、俺に丸投げするんだ？ 接続ミッションのことも一言も口にせず、それを追及したら、逆に叱責された。犬じゃあるまいし、こんな扱いは耐えられない」

「じゃあ、どうして契約する時に、ちゃんと業務内容を確認しなかったんだ」

「……」

「基本中の基本じゃないか。それとも、ろくに中身を調べもせず、雇用契約書にサインしたのか？ 理事長は善人だから君も真つ当な職を得たけど、相手が悪人なら、今頃ネンプロットの不法採掘場でツルハシを持たされてるぞ」

マードックは作業用の踏み台に腰を下ろすと、「まあ、悪く考えるな」と慰めた。

「君には何もせず、タダ飯を食らう選択肢もあるわけだ。自分の職能にこだわって、採鉱システムに背を向けることも。だが、君は真つ直ぐ僕の所に来て、自分から採鉱システムに携わりたいと言った。だから僕もそのように対応している。これからだって、自分のやりたい仕事がいくらでも出来るじゃないか。海洋調査でも、海運でも、必要とされる部署は方々にあるし、マネジメントに興味があるなら、エンタープライズ社で一から業務を学ぶことも可能だ。これ以上の待遇があるか？ 僕にも理事長の意図は窺い知れないが、他のスタッフより別格なのは確かだよ」

「そして、水深三〇〇〇メートルで高電圧のリアクターを繋がる？」

「まあ、落ち着けよ。刑務所の電気椅子じゃあるまいし、接続した途端、高電圧を流すわけがないだろう？ 通電するのは君と潜水艇が海上に揚収され、オペレーターシヨールームで十分に安全を確認してからだ。万一漏電したら、数万ボルトの高電圧が揚鉱管を伝って探鉱プラットフォームを直撃するからね。それに当日は、管制室やオペレーターシヨールームから四十人以上のスタッフフォローする。一カ所でトラブルが起きて、すぐさま全体に波及することはない。ステラマリスの深海調査もそうだろう。落ち着いて考えれば、みな分かることだ」

彼はプロテウスの船体にもたれ、「情けないな」とこぼした。

「以前の俺はもつと毅然としていた。あそこに行け、これをやれと言われても、動じなかった。それだけ自分の技量に自信があったからだ。だが、今は以前のようない気持ちにならない」

「君も完全主義だな。プラットフォームには今日着いたばかり。接続ミッシヨンはさつき知ったばかり。それで自信満々に領く人間がいたら、そいつは優秀じゃなくて、ただの無知だ。君は確かな知識と技術がある

から、海中作業の危険性が理解できるんじゃないか。誰も明日から完璧な操作など期待していない。でも、君は自分が許せないタイプなんだな。世間ではそういうのを「完全主義」って言うんだよ」

「完全を目指しているつもりはない」

「だが、自分の弱さや欠点が許せないだろう。今日からでも完璧に操作できなければ、自分は駄目だと思ひ込む。理事長に突っ掛かるのも、本当は怖いからだ。でも、自分で認めたくないから、理事長の対応に文句を付けている。まあ、事前に十分な説明がなかったのも本当だろうがね」

「……」

「怖いなら怖い、出来ないなら出来ないでいいじゃないか。さつきも話したように、僕らにはオール無人機という選択肢もある。これから六週間、全力を尽くして、君がどうしても無理と判断するなら、それでいいんだよ。完全主義も上手に生かせば、人より優れた仕事事が成し遂げられる。良い風に考えれば、それだけ向上心があつて、努力家という証しだからね。とりあえず耐圧殻の中に入って見ないか。実物を見れば、君も納得するはずだ」

マードックは作業用台車の梯子をトントンと登り、船体上部のハッチを開いた。彼も後に続き、耐圧殻の中に入った。

深海の超高压にも耐える真珠の耐圧殻は、厚さ八センチメートルのニムロイド新合金<sup>エヌエム</sup>NM<sup>ニユー</sup>NU<sup>ニユー</sup>で作られている。球の内径は二・一メートルしかなく、身長一八五センチのヴァルターと一九〇センチのマードックが中に入れば息も詰まりそうだ。

耐圧殻の床にはエンジ色のカーペットが敷き詰められ、保温と居住性に配慮されている。主操縦士は折りたたみ式の操縦席に座り、副操縦士と他の同乗者は直接床に座るか、腹ばいになる。少しでも身体的な負担が軽減するように、床には黒い革製マットが二つ並べられているが、それでも身体を真っ直ぐ伸ばせるわけではない。

外部を観察する為の覗き窓は三つ。耐圧殻の中央と、下方の左右に一つずつ取り付けられている。覗き窓といつても普通のガラス窓ではなく、深海の破壊的な超高压に耐える特殊メタクリル樹脂製の。形状もレンズ型ではなく、底の深いすり鉢型で、厚みは十六センチ以上ある。耐圧殻の外から見ると、覗き窓の大きさは

五十センチあるが、すり鉢状なので、内側の直径は十二センチしかない。ぎりぎりまで顔を寄せて、ようやく覗き窓の外を観察できる程度だ。

海洋技術センターのプロテウスと異なるのは、操縦席が中央の覗き窓の手前にあり、操船用のコンソールもマニピュレーターのコントロールも大きめに作られ、機械操作を前提とした機能が盛り込まれている点だ。

コンソールはラップトップ式で、十五インチのタッチスクリーン式モニターにキーボードとトラックパッドが備え付けられている。コンソールの左右にはマニピュレーターを操作する為のジョイスティック、前面には音声操作のヘッドセットが取り付けられ、手動と音声の両方でコントロールが可能だ。また肘や上腕を置く部分にはハンドレストのリラクゼーションジェルが施され、少しでも手指の負担が軽減するよう工夫がなされている。

操縦席の右上部には、マニピュレーターの手首に装着された水中音響リストカメラのモニター、左上には船体前面に装備する水中カメラのモニターが設置されているが、それも音声操作で海底地形図に切り替え